

野坂昭如 (のさか あきゆき)

昭和5年 東京に生まれる

早稲田大学文学部中退後 芸能プロ・マネージャー

ラジオTV脚本執筆などに従事

「アメリカひじき」「火垂るの墓」で第58回直木賞受賞

著 書 「エロ事師たち」

「とむらい師たち」

「受胎旅行」

現住所 東京都練馬区豊玉上町2の19

アメリカひじき 火垂るの墓

定価 四〇〇円

昭和四十三年三月二十五日 第一刷

著 者 野 坂 昭 如

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五一一二一

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一落丁・乱丁がありましたらおとりかえします

© 1968 Akiyuki Nosaka
Printed in Japan

アメリカひじき 5

火垂るの墓 55

焼土層 87

死児を育てる 115

ラ・クンパルシート 145

プアボーイ 189

装
幀

永
田

力

アメリカひじき
火垂るの墓

アメリカひじき

炎天に、一点の白がわきいで、あれよと見守るうち、それは円となり、円のまんなか、振子の
 ようにかすかに揺れうごく核がみえ、一直線にわが頭上をめざし、まごう方なきあれは落下傘、
 にしてもそのわきいでた空に、飛行機の姿も音もなく、はて面妖など疑うより先きに、落下傘は
 優雅な物腰で、枇杷、白樺、柿、椎、百日紅、紫陽花と氣まぐれなとり合せの、びっしり植えこ
 まれた庭先きへ、枝にからず葉も散らさず、ふわりと降り立ち、「ハロー・ハウアーユー」瘦
 せた外人、そうパーシバル將軍に似た毛唐が、にこやかにいった。純白の落下傘は、ケーブのよ
 うに毛唐の肩をおおい、なだれ落ちては庭土白妙の雪と変^カさてハローとあいさつされたのだ
 から、応えねばならぬ、アイアムベリーグラッドトゥシーユーか、この突然の来客に、いや来客
 かどうかもうたがわしい毛唐にこれはおかしい、フリーアーユーは、いかにも詰問調、貴様は誰だ、
 誰だ、誰だ三度尋ねて答えがなければズドンと射殺、なにを考えてる、とにかくあいさつが先き、
 ハウ、ハウ、ハウと、下腹からげじげじはいのぼり、しかも口中ねばついてままならず、以前に
 もたしかこういう風に、せっぱつまった記憶がある、あれは何時だったか、考えこんだところで

ようやく俊夫は夢から覚め、かたわらに妻の京子、海老のように体まるめ、その尻に押されて、俊夫は、べったり壁と向き合い窮屈な寝相、邪慳に押しもどすと、バサッ、ベッドから何かが落ちた。

落ちたのは、寝つく前に京子のブツブツと拾い読みしていた日常英会話の本と、すぐにわかり、わかったとたん、今見た妙な夢も、腑におちる。

今日の夕方、俊夫のまるで知らないアメリカ人老夫婦が、遊びにやってくるのだ。一月ばかり前「パパ、ヒギンズさんが日本にいらっしゃるんですって、家に泊っていただきましょうよ」エメールの、赤白紺だんだらにかこまれた封筒をひらひらせながら京子は、興奮していい、ヒギンズ夫妻と京子は、この春、ハワイで知り合った仲。

ちいさいながらも、TVC Mフィルム制作のプロダクションを俊夫は主宰し、スポンサーとの打合せ、撮影の立ち会い、時間不規則な明け暮れの、その埋め合せのつもり、なにより航空会社につてがあつて、割安で利用できたから、京子と、三歳になる一人っ子の啓一を、いささか分不相応のうしろめたさ感じつつも、小商い井勘定のありがたさ、旅行のかかりは経費でおとせばよいと、ハワイへやり、短大で英会話を習ったというものの、子供連れでどうなることかと案ずるよりは、女の一得か図々しく羽根のぼし、彼の地で沢山友人をつくり、その中にヒギンズがいた。なんでも国務省を退いて恩給暮らし、三人の娘それぞれ嫁いでいて、現職の頃はどのような地位にいたものか、夫婦睦まじく世界を旅行して歩くいい身分。

「あっちの人ってつめたいのね、親子だつて結婚した後は、他人みたいらしいのよ」自分の親への仕打ちは棚に上げ「私はまあ、親切にしておけば損はないと思つて、面倒みてあげたら、もう感激しちゃつてさ、実の子供よりかわいいて」そしてけつこう、五百ドルの旅費では手の出ない高級ホテルの食事やら、飛行機チャーターしての島めぐりの相伴にあずかり、帰国の後も、七月の啓一の誕生日には、チョコレートを送つてくれたし、そのお返しにこちらからは民芸風花ごさをプレゼント、週に一度はエアメール太平洋を越えてとびかい、そのあげくの果ての来日の通

「とってもいい人なのよ、パパだって、やがてアメリカへ行くことがあるでしょ、知ってる人がいれば心強いじゃないの、啓一にもね、是非、アメリカの大学へ入るようになっていって欲してるのよ」どこまでが打算なのか、三つの啓一がかりに大学へ入るとして、後十五年、それまで退職官吏の寿命がつづくものかと、茶化したかったが、京子の胸算用めかした台詞はあくまで夫妻むかえれば金もかろうその弁解。ひたすらアメリカ人を我が家の客とする、その晴れがましさに有頂天、「あなたの家庭をみたいって、前からいってたのよ、旦那さまにも会いたいって」俊夫のなにもいわぬ先きに、すでに承諾したものと決めこみ、「啓ちゃん、ヒギンズのおじいちゃまとおばあちゃまがいращやるんですって、覚えてるでしょ、おじいちゃまが啓ちゃんにハローっていったら、啓ちゃんバハハハハって手をふったじゃない」ころころと笑い出す。

ハローバハハイ日米親善か、二十二年前の今頃は、キューキューと日米親善だった。

「アメリカは紳士の国や、レディファーストいうて淑女をうやまい、礼儀を重んじよる、レディファーストの方はさしあたって関係ないが、この礼儀な、ばくは君らが無礼なこととして、それで日本は野蛮国やと、アメリカ人に思われへんかと心配しとるんや」それまでは心ならずも敵性語を教える、そのひけめおぎなわんためか、ねずみのようにこまめに生徒どやしつけた英語教師、こいつはまた臆病で、空襲やいうと壕の中で般若心経をふるえながら誦みよったが、ケロッと敗戦後はじめての授業でこーいい、黒板に「THANK YOU」「EXCUSE ME」大書し、ついで軽べつした顔で「と書いてもよう発音でけんやろ」教室見まわし、ふり仮名をつけると「サンキュー、エクスキューズミイ、ええな、このキューにアクセントつける、キュー」キューの上にぎりぎりど力こめて線をひき、勢余って白墨が折れとび、みんなは、ああまたやっとなと薄笑い、二月前まで、漢文の教師が授業そっちのけで、本土決戦天佑我れにありと説き、鬼畜米英と書くとき、常に憎しみあふれて、黒板キイツときしみ、白墨が折れるならわしだった。

極端にいえば、キューッだけいうてニコッと笑うたら、アメリカさんに通じる、ええなど教わり、キューキューで一時間終ると、校庭の周囲にぐるりと掘られた防空壕の埋め立て、石が当たるといえばキュー、太い支柱の片方持ってくれと頼む時もキュー、これはたちまち流行語となった。

俺達が、英語できんのも当り前や、中学入って三年目で、綴りの書けるのはBLACKとLOVEくらい、なんや英語らしい英語と覚えとったんがアンブレラ、人称代名詞のアイマイミイも

区別がつかん、昭和十八年に入学して、たしかに一学期はローマ字の読み方をまず教わり、家へ帰ってバターの容器にホッカイドーコーノコーシャとあるのを読んだのが横文字解いた最初、デイスイズアベンに毛も生えぬうち、英語の授業すべて教練と入れ替り、雨の日だけはそれでも英語教師が教室に来たが、「なんせアメリカの大学では、週末になるとダンスパーティーなんかやってあそんでばかりおる、そこへいくと日本の大学生は」と学徒出陣を讃美し、「お前ら、イエスカノウだけ知っとたらええねん、シンガポール攻略に際し、山下將軍は敵将バーシバルに」ここでドンと机たたき「イエスカノウかな、この気魄や」顔面神経痛の、頬ひきつらせ眼玉むいていう。試験はあったけど、その和文英訳の問題が「彼女の家」これシーイズハウスと書いても、点がもらえた。

毛唐の代表はバーシバル、ユニオンジャックの旗と白旗ひとまとめ重そうにかつぎ、半ズボンから細い脛みせて、「毛唐は、背はでかいが腰が弱い、これはつまり椅子にすわっとるからや、われわれ日本人は、畳で生活しておる、正座というのは、腰を強くするんだなあ」柔道教師が、「脚下照顧」とある額の下でさけび、「そやから毛唐なんか、がっとう腰にくいについて、腰投げ、内股、大外刈り、いっばつで決まる、わかったなあ、立てえ！」乱取りの時も、仮想敵はバーシバルで、あのうつむいてたよりなきそうなおッサンを、エイと投げとばしすかさず押えこんで首しめ上げて、イエスカノウか、イエスカノウか。

二年になると、農村へ勤勞奉仕、サイパン陥落後は家屋疎開、畳、襖、障子、雨戸などの建具

を大八車で近くの国民学校へ運び、がらんどうになったところで、消防が大黒柱に綱かけてひき倒す、いかにもあわただしく去った住人の名残りは、風呂の水はそのままやし、便所の軒下にボロのおしめなんか干してある、ほていさんの掛軸、加藤清正みたいな三つまたの槍、空の貯金箱、これは鹵獲品^{ろくかく}やいうて生垣の間にかくし後で持ってかえり、一冊、分厚い本があつて、英語ばかり書いてある、「スパイおったんちゃうか」「暗号かも知れんで」いいつつバラバラめくり、一同、自分の知ってる単語ないかと宝探するように眼をみはり、ようやく級長が「SILKHA T」を見つけ出し「つまり絹帽子いうことやなあ」絹帽子とつぶやいたとたんにむき出しの床板、古いカレンダー柱のお守りはがした跡すべて消え失せ、絹帽子かぶった夜会の風景が現われ、一人がつくづく「そうか、シルクハットは絹帽子のことやったんか」といい、俺はいまでもシルクハットときくと反射的に絹帽子が浮かぶ。

卓袱台の上に、京子の心のはなやぎそのまま、麗々しく置かれたヒギンズの、最初の手紙をみた時、俊夫はそのけげばけしいエメールの縁とり、胸騒ぎを覚え、それは英語に自信まるでなく、もし京子にたずねられて首ふらねばならぬ体裁のわるさよりも、アメリカ人から手紙をうけとること、当惑感、だが京子は、嬉々として、どうやら読めたらしいその内容を説明し、「返事出さなきゃならないんだけど、会社に訳してくれる人いない?」「そりゃまあ、いるだろうけど」「おねがい、もう書いてあるのよ」受けとって読むと、女学生の如き美辞麗句がならねられていて、その場は、将来の渡米を既定のこととして疑わず、英語に精出す若い社員の一人二人

思い浮かべ、頼む気になったのだが、いざあらためて読みかえし、「主人もたまわりました御厚意に、心から感謝しております」とあるのがひっかかり、破り捨て、しかし追っかけるように第二便がとどいて、近くの日本人が、訳してくれるから、気楽にお国の言葉で楽しいおたよりを下さいとあり、京子はその心づかいに感じ入り、長文の手紙を、俊夫の京都土産、大事の便箋にしたため送り、その内容は俊夫たずねなかったが、なにもかもあけすけに、やや見栄張って報告しているようで、「TVフィルムの仕事はアメリカでも、もっとも有望な職業だってヒギンスさんいってくれてるわ、忙しいだろうから体をこわさないようにってさ、聞いているの？ あなたによ」ハリウッドの映画会社買いとるようなTV映画プロダクションもあれば、せいぜい五秒十五秒単位のCM、ただもう薄利多売の俊夫のなりわいも、電話帳ならば同じ欄、その差説明する気にもなれず、上の空でいると、京子はじれ「パパもアメリカへ行ってくればいいのに、箔がつくわよ」「今更おそいよ、いやかえって、猫も杓子も海外旅行なんだから、いっそ一度も行かなきゃ稀少価値を生ずるかも知れない、生半可な外国に毒されてないって」「負け惜しみよそんなの、言葉なんか行けばなんとかなるのよ」京子は、ハワイ旅行が決まると、英会話のレコードを買い、税関でのうけこたえ、買物の言葉などを練習し、あげくの果ては「パパ、ママなんていわないそうね、ダディにマミーですって、ママっていうのは、下品な女の人を意味するそうよ」啓一に、その通り教えこみ、まさか当今お父ちゃんでもあるまいと、パパと呼ぶのを許していた俊夫も、ダディには我慢ならず、いい争った末、ハワイではいざ知らず、日本にてはパパと呼べ、珍しく

強くいった。

敗けるまでは、ろくすっぽ教わらないまでも、とにかく書く英語、敗戦後はしゃべる英語で、その象徴がカムカムエブリボディ、中学四年になると、ESSができて、これが校内のエリート、柔道場変じてレスリング部となった建物の前の陽だまりで「ウァッツマライズユー」と問いかけられ、ツマラはトゥモローのことか、とすると、「明日は何をするか」やろか考えるうち、その上級生はせせら笑い「ホワットイズマターウィズユーなんかいうても通じへんで、ウァッツマライズユー」さては「ハバグタイム」いい捨てて仲間と高笑い。四年修了で俺は学校を辞め、親父は戦死、お袋は病身、女学校二年の妹が家をとりにしきり、俺はまず靴下工場から、乾電池の工場、京阪日々新聞の広告とりと三人の食いぶち支え、ある時、さぼって中之島公園ぶらぶらするうち、「あんた学生さん？ 学生さんやったら、頼みたいことあんねん」

予科練の七つボタンの下二つつぶし、ズボンは脛から下細うなった綿の乗馬ズボン、当時としてはまともな風態に心ゆるしたか女に声かけられ、アメリカ兵とつきあいたいねんけど、橋わたしてくれんか、なるほどその視線の先きに所在なげな兵士一人、川に浮かぶボートながめていて、「お礼しますやん、明日ここで待っててくれたら」しかし、ハウアーユーがあいさつと知ってはいても、毛唐にむけてこころみたことなく、ぐだぐだするうち、兵士は気配きとったのか近寄って来て、「スクイーズ」いいつつ厚ぼったい掌をさし出す、スクイーズが一瞬わからぬ、だが英語の教師が野球部の監督もかねていて、「このスクイーズというのは、しぼるにぎりしめる

いう意味や、雪をスクイズするとスノーボールになるて習たやろ」キョトンとした部員に説明していたのを思い出し、おずおずにぎりしめると、兵士は力はそれだけかという風に俺をみると、紙屑まるめるような気楽さで逆にスクイズし、とび上るほど痛かった。女の前でええかつこしたかったんやろか、顔しかめた俺に、女が笑い出し、そこをすかさず兵士しゃべりかけ、女は当惑して俺をみるが、そのきれぎれにネーム、フレンドなど、単語はわかっても見当つかん、四年になってから、ようやく本格的に授業が行われ、だが英語教師の数が足らんから、臨時雇いで、「日本ではチンチンと、電車のベルをいうけど、アメリカではディンドンや」ニャオがミユウ、コケコッコがクックドゥドルドゥ、擬音の説明ばかりして、それをまたクソ真面目な奴は、単語カードの表にチンチン、裏がえすとディンドンと書いたり、かと思えば、「ヒイキャノットビイコーナード」これすなわち、彼はなかなか隅におけんという意味と、わからんながらも眉に唾つけたくなる英語ばかり教える爺さん。この連中に習うたんやから、兵士の言葉は唐人の寝言そのまま。

なにかいわんならんと、ようやく兵士と女交互に指で示し「ダブル・ダブル」思いがけぬ絶叫がほとばしり、兵士はOK OK満足そうにそのまま女の肩を抱き、俺に「タクシー」と命令する、そらたしかに、背中に鞆しよったみたいなたクシーはぼちぼち走ったが、どんな風にとめるのかも知らん、当惑していると兵士は手帳を破ってボールペンで「TAXI」と一字一字大きく書き、俺につきつけ鼻ならして催促し、らちあかとわかったか、女うながして歩き出す。俺は